

転生したら  
チートすぎて逆に怖い②

至宝里清  
Risei Shiho

Regina<sup>+</sup>  
BUNCO

# 登場人物紹介

**リーベ・フリードリヒ&  
エルビス・フリードリヒ**  
フリードリヒ公爵家の双子。  
フィエルテを溺愛する光と影のような存在。

**ネオス**

王国の第二王子。  
光魔法の使い手。

**ジュール  
・フリードリヒ**

フリードリヒ公爵家三男。  
大人しいが、植物を育てる天才。

**ルアアパル**

フィエルテと契約したムーンウルフ。  
普段は彼女の影に住んでいる。

**フィエルテ  
・フリードリヒ**

お詫びチートで、無限の魔力を持つ幼女。  
パワフルに異世界を満喰!

**ディライト  
・プレザントリー**

フィエルテの「運命の番」。  
少々自分に自信がない。

## 目次

転生したらチートすぎて逆に怖い 2

番外編 フイエルテの社会科見学

書き下ろし番外編

ジユール兄様のお熱日和

転生したらチートすぎて逆に怖い 2

## プロローグ フイエルテ・フリードリヒ

思い返すこと、五年と少々。

フイエルテ・フリードリヒ、六歳です！

四人の弟妹を持つて働きづめの人生を送っている最中に、私は神様のミスといふイレギュラーな死によつてこの世界に生まれ落ちた。

そのお詫びとして神様からもらったのは「努力次第でなんにでもなれるチート」と「受け止めきれないほどの愛」。

そうして私はフリードリヒ公爵家の娘として生まれ、最強で最高の家族に出会つた。そしてムーンウルフのルアアバルとも出会い、この世界で元気いっぱいに生きている。さらに、この世界には魔法と精霊が存在する。

魔法は六つの属性に分かれています、精霊は属性ごとに色が違う。炎の赤、水の青、風の緑、土の茶、光の金と闇の黒。掌サイズのカラフルな彼らは子供にトンボのような<sup>はね</sup>翅

が生えた姿をしている。どの子も小さな子供のようにどんなことにも興味津々で、やや飽きっぽい。人型をしているとはいえ人間じやないから、感情のままに行動することは多くてたまに残酷だ。

その結果、村を滅ぼしたなんて歴史すら残つているけど、自分が好む相手のためには一生懸命行動するから根はすごくいい子たちだと言つていい。

私には神様からのお詫びチートがあつたせいで、精霊たちからよくちょっかいを出させていた。

ただ、精霊たちを自分の目で認識するためには、魔力鑑定というものをしなければならないなかつたから五歳までは謎の存在だつたんだけどね。

そんな魔力鑑定式ではルナという友人までてきて、とっても嬉しかった。

ルナはフォルトゥナ商会という大商会の娘で、とっても目利きの女の子だ。

特にこの世界では砂糖でものすごく甘くしたお菓子しか食べられないから、ルナのお

うちが取り扱つているフルーツが私にとつての救世主だつたよ……！

ルナのおうちは王家御用達の人気商会だから扱つてるフルーツもすごく美味しい。さつぱり食べられるフルーツって最高だよね……!!

はやれることも限られていて、もどかしい思いをしたことも一度や二度ではない。

それでも、これから成長していくこうつて決めて、このフリードリヒ公爵家ができる」とを探している。

神様から無限の魔力をもらったのはいいけれど、この世界では魔力を五歳になるまで感じ取れなかつたし、魔法を使いこなせるようになるのはもつと後の話だつた。

でも、「努力次第でなんにでもなれる」つてことはこれからだよね！

そんな訳で、今はちょっと感情に引きずられやすくて熱を出しやすい体を改善中だ。体がもう少し丈夫になつたら、いっぱい愛してくれている家族に何かお返しができるよう、お金が稼げないかな、なんて思つてゐるんだけど……

「ファイル、考え方？」

「ん、ちょっと今までのことを思い出してた」

「ん、と頬をつつかれて振り向くと、デイライト——ディーが私を見ていた。

狐と兎獣人の血を引く彼は、もふもふの狐耳を持つてゐる。それがちょっと心配そうに動いてゐるのを見て、私は彼にもたれかかつた。

「この一年いろんなことがあつたもんね」

ディーはそんな私を見て優しく微笑むと、ぽふぽふと頭を撫でてくれる。

彼は私の『運命の番』だ。

六歳なのに運命なんて……と思うけど、『誰かに強く愛されたい』という願いを神様が叶えてくれたのだ。

ひょんなことから出会つた彼は複雑な事情を抱えていた。病気がちなシオン兄様と、獣人の血が混じるディーを蔑む家族——それらの問題が解決した今は、実家であるプレザントリー家を立て直すために奔走している。

「ディーとシオン兄様はこれからまだ忙しい？」

「そうだね……これからしばらくはあんまり会えなくなっちゃうかも知れない」

その言葉と共に、ディーがぎゅっと私を抱きしめる。

ディーの可愛さに内心ときめきつつも、私はディーを振り返つた。

「でも、それが終わつたらずつと一緒にいられるでしょ？」

「うん。そう思つて頑張るよ」

私の言葉を聞いてディーの尻尾がぽふぽふと揺れる。よかつた、喜んでくれたみたい。

ずっと忙しかつたから今日ぐらいはゆつくり……と思つた時、突然バチッと大きな音がした。

窓の方からだ。その音と同時にディーが私を窓から遠ざけるように抱き上げて、目を

「何か入ってきたみたい。『カラス』が追つてるのかな？ 少し木が揺れてる」

「侵入者？」

「おそらくね」

そう言つて辺りを警戒する姿は、プロそのものだ。  
じつとしていると、ピリッとした感覚が体を巡つた。静電気かと思つたけどなかなか治まらない。

「へ、ピリピリするかも？」

「大丈夫！？ ……ああ、相手の魔力に当たられたんだね、カラスが自分の魔力をルティに当てるようなへまをする訳がないし……少しだけ我慢できる？ 多分すぐ終わると思ふから」

こくんと頷いてディーにそつと寄り添う。

フリードリヒ公爵家はこの国の宰相であるお父様が当主で、この国で国王陛下に次いで力を持つていると言つても過言ではない。

だから敵も少なくはないのだ。

『カラス』と呼ばれているのは、我が家を守ってくれている国の暗部『オルニス』のこと。

『オルニス』はフリードリヒ公爵家が立ち上げた部隊だ。ちなみにディーもその一員だつたりする。

彼らが追いかけているということはつまり、我が家に忍び込もうとした暗殺者か何かなんだろう。

息を詰めてしばらくじっとしていると、そのピリピリする感覚は遠のいていき、何事もなかつたかのように部屋は静まり返つた。

ディーも体の力を抜き、時計を見上げる。

それから「あ」と小さく声を漏らした。

「ルティ。そういうえば、明日はリーベさんたちの学校の学園祭に行くんじゃなかつた？」

こんなに遅くまで起きていて大丈夫？」  
今日もミルク色の髪がさらさらとしていて綺麗……と見惚れてから、私は目をぱちくり。

唐突に日常全開なことを言われたことからつていうのもあるけど……

「え！」

「リーベさんがそうおっしゃっていたけど……」「き、聞いてないよ!!」

私は慌てて、窓の外を見る。すっかり遅くなってしまっていて、窓の外は真っ暗だ。お母様とお父様はまだお仕事で帰ってきていないけど、確かにいつもならそろそろ家にいるはずの兄様たちも帰ってきていない。

も、もしかして学園祭の準備があるから!?

このまま寝ずに待つっていたら怒られてしまいそうだ。きつこうつかりやなお母様やお兄様は私に伝えるのを忘れていたんだろう。

そうだとしたら、明日は早起きしなきゃじゃない!?

「——僕は念のためリーベさんたちにご連絡しておくから!」

そう言つてくれるディーにお礼とおやすみを言つて、慌てて私は自分の部屋に戻り、ベッドに飛び込んだ。自分の影に向かつてルアアパルを呼ぶ。

ディーの家族であるプレザントリー家の事件があつてからというもの、ディーとシンオン兄様は元の屋敷に戻り信頼できる使用者とそうでないものを分けたり、その不足を補うための人選を行つたりと忙しい。

だから今日は久しぶりにディーとゆつくりできると思ったのに……!

「ル、ルア!」

『どうした?』



すると影から大きくてもふもふの白銀の狼がするりと顔を覗かせる。彼がルアアパル——通称ルアだ。片耳だけ黒く、瞳に浮かぶ三日月は大きさに似合わず可愛いチャーミングポイントだ。

「明日、私が起きてなかつたら起こしてほしいの……！」

「ありがとう！」

もつぶりとした白くて綺麗な毛皮は毎日の手入れのおかげでとても綺麗だ。ルアは少し呆れた口調だったが、私がギュッと抱きしめるとその温かな体で私を包んでくれる。うう……学園祭、楽しみだなあ……！

もしかしたら眠れないかもしれない、と思つていたけれど、ルアに優しく尻尾で体を撫でられているうちに私の意識は闇に溶けていった。



「ま、間に合つた……！」

『おお、自分で起きて素晴らしいな、ファエルテ』

「ありがとう！」

翌日、私はなんとか起床することに成功した。

ルアも何度も他の部屋には届かない程度に吠えることで、私を起こそうしてくれたらしい。

ただ、残念ながらディーは私の寝ている間にまたプレゼントリーの屋敷に戻つてしまつたようで、無事の起床を祈るお手紙がそっと机に置かれていた。  
寂しいけど、私とディーはお互いの心を『結んで』いるから、ぎゅっと手紙を胸に当てるど、ディーが今も私のことを想つてくれてることが分かる。

「お土産いっぽい買ってこようね！」

『そうだな、デイライトも喜ぶだろう』

ルアはそう言つて尻尾を一つ振つた。

それから「早起きですね」とメイドのリリアに言われながら、大急ぎで準備をする。

なんとか、我が家の前にお迎えの馬車が来る前に私は準備を終わらせることができた。足早に部屋を出ると、嬉しそうなお父様とお母様が私を待つていた。

「今日は楽しみですね」

「しつかり準備ができていて偉いわ。たくさん楽しみましょうね」

國のお仕事を一手に担うお父様とお母様は、無理やり今日のお休みをもぎ取つたらしい。

笑顔で私の手を握ってくれた。

……私は学園祭の連絡ができなかつたのも、ぎりぎりまでお仕事をしていただせいでどうから仕方ない。私は大きく頷いて、馬車に乗り込んだ。

## 第一章 初めての学園祭

「うわあ……！」

目の前に広がる鮮やかな光景に目を奪われる。

そのワクワクを誰かに伝えたくて振り返ると、私のことを微笑ましそうに見つめるお父様とお母様がいた。

ちょっと恥ずかしくなつてもう一度周囲を見回す。

王宮みたいに大きくて広い建物全体が色とりどりの花やリボン、フラッグなどで彩らいろど

れている。それに魔法かな？ 空を見上げれば紙吹雪や花吹雪が舞つていた。

本当に夢のように素敵なお景だ。

さらに大きな門をくぐると、色々な露店が並んでいて目移りしてしまう。

「ふふ、すごいでしょう？」

「はい！ 全部キラキラしてて、たくさん的人がいてすごいです」

「ファイル、はしゃぐ姿も可愛いですが危ないですよ。入学前に将来入る学園で転ぶなんて先生に見られたら恥ずかしいでしよう？」

「気を付けます！」

お父様からの忠告は聞こえているが、どうしても興奮が抑えられない。

王立学園ブリムールの学園祭は年に一度の学園の一大イベントでとても有名だそだ。プロではない生徒が出店なのにそのどれもが学生とは思えないクオリティのものが多く、王都に住む多くの人たちから愛されている。

作成者がプロではないからこそ、安く販売されている魔道具は特に平民の人たちに大人気だ。

でもやっぱり貴族が多く通う学園だから、警備上の問題もあって学園祭に参加できる人数は決まっている。この学園に通う生徒の家族と抽選で当選した人たちが学園祭に参加できるようになっていると兄様が言っていた。

もちろん私は今回、家族枠で参加している。うちは今三人のお兄様たちがこの学園に通つてゐるからね。

きらきらと輝く景色に目を奪われながらも、お母様を振り向く。

「お兄様たちのお店楽しみです！」

「ふふ、そうね。あの子たちは自由時間を捕えたと言つていたし、先にあの子たちのお店に行きましょうか。その後あの子たちが休憩に入つたらみんなで他の場所を回りましよう」

「そうですね。私たちが参加できるイベントもあるようですし、それまでは学園の見学も兼ねてお父様が色々教えてあげますからね」

「ありがとうございます！ お父様！」

嬉しくなつてぎゅっと抱きつくと、お父様の顔がでれつと緩んだ。

そういえば、最近お父様が私のスキンシップが減つたって嘆いていたっけ……

そんなことはないとは思うんだけど、ディーがいたらディーにくつつきくなつてしま

まうから、この頃はお父様にくつつく頻度が下がつていていたかもしねれない。

無意識にディーにばかり甘えていたかと思うと恥ずかしい。

ディーに八つ当たりして、お母様に怒られるお父様は可哀想だし。

今日はお父様とお母様と一緒にいつぱい楽しもうかな。

「まずはリーベとエルピスのところに行きましょうか」

「はい！」

お父様とお母様と手を繋いで、双子の兄様——リーベ兄様とエル兄様のところへ向かう。

背の高い二人に挟まれるとたまに浮いてゐるみたいになつてしまふ。夫婦仲がいい二人は私の憧れだから、私としては二人が手を繋ぐところが見たかつたんだけど……そんなことを考えながら歩いていれば着いたみたいだ。

「フィルー！ 元気か？ 気持ち悪くなつたりしてないか？」

「リーベ兄様！」

大きな声で私を呼びながらリーベ兄様が近づいてくる。今日もお父様と同じ銀の髪がとつても素敵で、綺麗なピアスが耳元で揺れていた。

どうやら私が魔力酔いを起こしているんじゃないかなって心配をしているようだ。

今日は周囲に人も多いので、魔力酔いを止めるあの苦い薬を飲んできた。だから大丈夫ですよーと言つて抱きつく。

するとリーベ兄様はギューッと抱きしめ返してくれた。そうしていればエル兄様がため息をつきながら、こちらに走り寄ってくる。

「リーベ、他の人もいるんだからあんまり大きい声で叫んじゃダメだよ」

「大丈夫だつて。お前は固いんだよ、エル。みんなも結構はしゃいでるし」

「まったく……リーベはいつもそうなんだから」

お父様に似た銀髪のリーベ兄様と、同じ銀髪だけど、お母さんに似たピンクのグラデーションが入った髪を持つエル兄様。二人はとっても対照的な見た目と性格を持つている。いわば陰と陽、光と闇みたいな。

だからたまに喧嘩をしているんだけど……

ふむ。

トタトタとお兄様たちに近づく。それからぎゅっと二人の手を握って、上目遣いで顔を見上げる。

「二人とも、喧嘩は……ダメ、です！」

「っ、なんて可愛いんでしよう!?」

ちよつとお父様はお静かにお願いしたい。

別に今の会話は喧嘩つてほどじゃないけど、せつかくの楽しい日だからずっと笑つてほしいじやん。

だからお兄様たちが言い合う前に止めなきゃと思った次第だ。

普段は仲良しだけど、この頃は学園祭間近で忙しかったからか二人ともピリピリしていたみたいで、時折家中で魔力がぶつかり合っているような気配がしていた。元々正反対の性格の二人だからぶつかる時はすごく大きぶつかっちゃうんだよね。

……家が所々壊されるレベルで。

びっくりするのでそれはやめてほしい。

我が家はみんな魔力力量が多いから、感情が昂ると周りに影響が出てしまう。たかぶだからこそ魔力操作をしつかり学んで、何かあった時の被害を最小限に抑えられるようにしてい

るんだけど、やっぱり心の操作は簡単ではない。

どんなに魔力操作を完璧にしたって、人間は感情に影響されやすい。だからこそ魔力操作は基本だけど一番大切で一番難しいとお母様に教えてもらつた。それでもしつかり感情を抑えられる両親は私の目標だ。

私はまだ魔力操作を習っていないけど、もうすぐ教えてもらえるようになる。

私もただでさえ泣きやすい体なので、魔力と一緒にコントロールできるようになったらいいんだけど……！」

色々考えていると、エル兄様とリーベ兄様は私にじっと見られ続けてだんだん居心地が悪くなってきたらしく、あわあわと手を動かしている。

「ご、ごめんねファイル」

「……あー、わりい。せっかくの学園祭だしな！ 遊びに来たんだろ？ ほら、これが俺たちのクラスの出し物だぞ！」

そう言って、二人は今度こそ息ぴたりで、チラシのようなものを私に見せた。  
魔法がかかっているのか、チラシからはさらさらと燐光が散っていて、「挑戦者募集！ 文武揃えば攻略可能！」という言葉が紙の中でくるりと回っている。  
「出し物は迷路。ファイル一人だとしかしたら難しいかもしだれだけど、父さんと母さんがいるし、絶対楽しめるよ」

「迷路……？」

あつち、と指さされた方を見ると入口から奥がまったく見えない、小さな建物がある。入口の看板に、確かに迷路と書いてある。「文武揃えば攻略可能！」って書いてあるということは頭の良さと力の強さが必要ってことかな？

まるで武勇に優れたりーベ兄様と優しくも聰明なエル兄様をそのまま表したような出しどだ。

「やつてみる？」

エル兄様が私の頭を撫でながら聞いてくる。

そうしている間にも楽しそうだけど悔しそうな声を上げて、迷路の出口から人が出てくる。

きっと途中でクリアできずにリタイアしたんだろう。

うーん、面白そうだけど、兄様が言う通り、一人じゃ寂しいし難しそうだな。作成者であるお兄様たちはもちろん参加できないだろうし……お父様たちならついてきてくれるかな。

ぎゅっとお父様に抱きついてアピールしてみる。

「お父様。私、お父様と行きたいです……かつこいいとこ見たいです！」

「ファイル、お母様は？ お母様の方がきっとすぐ攻略できるわよ？」

「何言つてるんですかアイシャ。ファイルは私と行きたいんですよ。お父様のかつこいいところが見たいんです！」

あちやー、どうやら言い方を間違えちゃったみたいです。

可愛く頬を膨らませるお母様と、なんだか身にまとつてゐる魔力が私の魔力感知にがんがん引っかかるつてくるお父様。どちらも負けないというようにこつちを見てくる。

入口で言い合つてゐるから他の人の視線が気になつてしまふ。ただでさえうちの家族は顔がよすぎて、一人でいても人が寄つてくるのに、今はジユール兄様以外の全員が揃つてゐる。そもそも宰相であるお父様と、国王陛下の妹で国一番の魔術師であるお母様は注目されるのに……！ そんな二人が子供のように言い合つてゐるから、さらに注目されまくりだよ。早く中に入らなきゃ！

「じゃ、じゃあ三人でもいい？」

祈るようにエル兄様とリーベ兄様を見上げると、二人は肩をすくめて微笑んだ。

「俺たちもだけど、父さんたちがファイルのエスコート役を譲る訳ないしな」

「この頃デイライトに取られっぱなしだったから三人でいいと思うよ。……一瞬でクリアされたらどうしようかな、とは思うけどね」

ほつとして今度はお父様とお母様を見上げる。

今度こそ二人は喧嘩をしなかつた。

ぎゅっと二人の手に自分の手を乗せれば自然と握ってくれるから、リーベ兄様とエル

兄様に案内されて、私たちはそのまま建物の中に入つていく。

中は暗いけど、足元が見えないほどじゃない。夜道にある街灯みたいに、所々壁の辺りが光つてゐる。

入る前にエル兄様に渡された出し物の説明と、リーベ兄様に渡された杖は腰にくくりつけて進む。

えつと？ 説明書きに目を落とし勉強したばかりの文字を読み解いていくと、どうやら謎解きをして正しいルートを進みつつ、それぞれの部屋にいる門番を倒さないといけないようだ。門番に挑む方法は様々で、途中リタイアもあるけれど、見事クリアすればこの学園祭で使うことができるクーポンがもらえると書いてある。

なるほど『文武揃えば攻略可能』だね。

一人だけで挑むんじゃなくて、グループで挑戦したら絆が深まるかもしれない。いいゲームだ。さすがお兄様たち！

そう思つて歩き続けていると、分かれ道があつた。パツと見、道に違いはなさそうだけどどっちに進めばいいだろう？ 二人を見上げると、「ファイルの思うがままに進めばいい」という言葉が降つてきた。

責任重大すぎる……！」

「じゃあ、こっちに行きます！」  
迷った時は左に進めって、何かに書いてあつた氣がするので左へ進む。

すると周りの暗さが一段高まつた。足元はぼんやりと光つてるので転ぶ心配はないけど、さつきまである程度見えていたお父様とお母様の顔が見えづらい。

「ファイル怖くないですか？」

「はい！ お父様とお母様がそばにいるので平気です！」

「それならよかつた」

お父様がぎゅっと私の手を握つてくれて、ほつとする。  
よーし、さらに先に進もう！ と思つた時だつた。

目の前にきらきらとした光の渦が立ち上り、ふわりと人の姿に変わる。どうやら生徒がやつてゐるのではなく、精霊か幻覚魔法のような感じだ。

「……あら、これが最初の問題かしら？」

お母様が足を止めると、門番らしきそれが微笑んだ。

『夜が笑う時。笑顔が咲き乱れる。我にその姿を見せよ』

柔らかな声でその問い合わせ二度繰り返される。最初は頭脳を必要とするみたい。

この門番は問題を出す担当だから倒す必要はないのかな？ それにしても夜が笑うつてどういうことだろ。笑つた時に笑顔が咲き乱れるつてそもそも矛盾している気がするし、もしかしてそのまま受け取つたらいけないのかな……

いくら考へても分からずお父様をチラッと見上げる。こういうのはお父様が得意だ。お父様はもちろん剣や魔法も使えるけれど、どちらかと言つて戦略を練つたり、頭を使つたりすることの方が得意だと言つていた。

するとお父様はちょっとイタズラっぽい笑みで私に言つた。

『夜が笑う』ところをファイルも見たことがあると思つよ』

「えっ？」

ヒント!? 目を見開くと、お母様もあらあらと言つて微笑んでいる。

こ、これは二人とも、もう答えが分かつてんじや……

『そうねえ、ファイルは夜じやなくとも近くで『笑う』のを二つ見ているかもしれないわ』お母様が両手の人差し指を私の口の端に当てて、きゅっと持ち上げる。

私の口が自然と笑みの形になつて……

「あっ」

「それってもしかして、三日月のことですか？」

「さすがファイル！」

夜に浮かんだ三日月は、日によつて笑みの形に見える。それに私のそばにいるムーン

ウルフ、ルアアパルの瞳には三日月が浮かんでいる。  
お母様たちはそうやって私にヒントを教えてくれていたんだ。

バスを出されてのシユートだつたとしても嬉しいものは嬉しい。

思わずその場で跳ねると、お父様に撫でられた。

「さて、その先は私が引き受けよう」

そうだつた、この先の『笑顔が咲き乱れる』はまだ解けていないんだつた。

でも月がいっぱいある訳じゃないし……

頭を悩ませていると、お父様は微笑んでお母様に向き直つた。

「アイシャ、スリールの花を」

「分かつたわ」

スリールの花？ 首を傾げていると、お母様が氷魔法でその場に美しい花を生み出した。ユリのような形をした真っ白な花で、三日月の模様が花びらの先に入っている。『スリール』っていうのは三日月が出る夜にしか咲かない花のことでね。咲き乱れる、

という言葉がヒントだつたのかな』

スリールの花は、言葉通り一輪ではなく群生で咲き乱れるらしい。三日月を笑つてゐる口元に見立てて、『笑顔が咲き乱れる』つてのがスリールの花のこと。それを見せてことは、スリールの花をなんらかの形で見せればいいってことだつたんだね。

お父様に教えてもらつて、思わず拍手をしてしまう。

すると、門番は『正解!!』と大きな声で告げて消えていった。

第一閑門突破だ。

「お父様すごいです！」

本当にお父様の知識量はすごい。この国の宰相をやつてゐるのは伊達じやない。宰相は王の一番近くにいて、国王が何かを間違いそうになつた時に諫めることも仕事のうちだ。

だからこそ何がダメで何がいいのか、この国のために何が必要なのか、他国との情勢も考えつづけで問題が起きた時まず一番最初に動かないといけない。

それを判断するために培われたのがこれらの知識なんだろう。

国のことを考えながら、家族のことも考えられるお父様つて本当に尊敬できる。

普段の私に対するデレデレが嘘みたいに、こういう時は格好良く見えるんだよなあ。

そうやつてお父様を褒めちぎりながら進んでいると、またいくつかの分岐に出会った。そのたびになんとなくこっちかな？ という方向に曲がっていく。

やがて、また目の前が光り輝き、二人目の門番が現れた。

『周りのものを壊すことなく我的みを倒せ』と門番が口にする。  
『周囲のものを壊すことなく我のみを倒せ』と門番が現れた。

えた。

一見ただの円柱に見える。大理石か何かでできているようなとろりとした質感の白色の大きな柱……どうやら魔力操作が重要な戦闘みたい。周りのものを壊さない繊細な魔力のコントロールと、この大きな柱を倒せるぐらい強い魔力を操作できるかどうかが求められているようだ。

これはお母様の出番かな？

にこっと笑って、一步前に出るお母様をじっと見つめる。

魔法の発動から攻撃まで見逃さないようにしつかりと。

お母様の魔法を使う姿は勉強になるつてお兄様たちが言っていた。

こういう狭いところで使う魔法ってどんなのがあるのかな？

お母様が一人で円柱の前に立つと、こちらを振り返つて微笑んだ。

「ファイル、お母様の魔法よーく見ててね」「はいっ！」

ドキドキしていると、お母様のそばに精霊が現れた。同時にふわりと爽やかな風を感じる。

『アイシャ、久しぶりー！ それにファイルも』

この声は、お母様と契約している風の精霊のリーンだ！ リーンが呼ばれたつてことは風魔法かな？ でも室内で風を起こすっていうのは……？

『さあ、リーン。力を貸して』

『なんだか楽しそうなことをてる！ もちろんいいよお！』

お母様の言葉と共に、小さな竜巻が巻き起こる。

リーンが自分の掌に息をふきかけたことで、小さな風の渦ができるようだ。リーンがお母様の前にそれを離すと、今度はお母様がその小さな風の渦に魔力を加える。

やがて小さかった竜巻は円柱と同じぐらいの大きさになった。

部屋の中で竜巻を起こせるのはすごいけど、そんなのを起こしたら周りの壁まで壊しちゃうんじゃ……？

「あれ？」

竜巻が、円柱を少しづつ削って上から崩していく。けれどお母様の後ろに立つ私たちにはそよ風一つやつこない。ただ、お母様の風の魔力がそこに集中していることだけが分かつて思わず見とれてしまった。

「すごいでしょう？ 部屋の中で竜巻を起こすという発想力。小さなものを作るための魔力の込め方。周りに影響を出さないようにするコントロール。あの人人が私の妻であり、あなたたちの母親なんですよ」

お父様が、誇らしげに愛おしそうにお母様を見つめてる。

「はい……。すごく、すごく綺麗です。お母様すごい……」

そう言つていると、あつという間に門番である円柱が消えていく。

『お見事！』という声だけが最後に響き、ひとかけら残っていた円柱は跡形もなく消えた。当たり前だけど周りには何一つとして影響は出でていない。

ただ、門番すらいなかつたのでは、と思えるほど静かな道が目の前に広がっている。それに対して、特に疲れた様子もないお母様。あのレベルの魔法を使えるなんてどれだけの努力をしたんだろう。才能だけで到達できるとは思えなくらいすごい魔法だった。

ただでさえ魔力量が多いと魔力量の調整や動かす時の操作が人の何倍も難しいはずなのに、それを簡単にやつてのけるなんて。

本当に自慢のお母様だ。

早く、私も早く魔法を使えるようになりたい。お母様みたいなすごい魔法を使えるようにな。

「さすがですねアイシャ」

「ふふ、ファイルのために張り切っちゃつたわ。どうだつたかしらファイル？」「すごかつたです！ やっぱりお母様は私の自慢のお母様です！」

「ふふ。ありがとうございます」

本当に、自慢のお母様だ。

私たちまたゆっくりと歩を進めた。

私が選ぶ道の二択を間違えていたのか、何度か見たことのある道に出ることもあったけど、お父様とお母様はまったく怒ることなくもう一つの道に足を進めた。

それからも何人かの門番に出くわした。

スフィンクスのように謎を出す門番、可愛らしく見えてすごく足の速い兎型魔獸の捕獲、音楽で作られた謎解き——様々な難関を私たちは突破していく。

そうして、しわがれた声で言つたチエスの騎士のような七人目の門番が消えると同時に、パツと目の前が瞬いた。

わあっと歓声が聞こえる。

辺りを見回すと入口に戻ってきたようだ。外の明るさが目に染みて、何度も瞬きをする。すると首にはいつの間にか、小さなメダルのようなものが下がっていた。

「まさか攻略者がいるなんて……」

お兄様たちのクラスメイトらしき人たちがこちらを見てびっくりしている。

その一方で、お兄様たちが結果は分かつていたとでも言うような苦笑を浮かべて賞品を持つてくれる。

学園祭内で使えるクーポン券だ。

ちょっと悔しそうな顔で、リーベ兄様は頭を搔いている。

「あー、やっぱり父さんたちには簡単だつたかー。結構企画する側の俺たちも趣向を凝らして、難易度も高めにしてたんだけどなー」

「ファイルがいるのに格好悪いところは見せられませんからね。しかし番人たち——幻覚魔法や、精霊魔法の使い方は見事でしたよ」

「うふふ、私も頑張っちゃつたわ！ フィルも頑張つてくれたしね」「うん！」

謎解きはヒントを出されてぱつかりだつたけど、兎型魔獣を捕まえる時にはルアを召喚して、一緒に隅つこに兎を追い込んだり、音楽をメモしたり、すごく楽しかった。

そう伝えると、お兄様たちはとても嬉しそうに笑ってくれた。

その光景と何かがダブつて、目を擦る。  
そうだ、前世でも似たようなことをしたんだ。確かあの子の文化祭もこんな感じだったつけ……

ふと、前世のことを思い出してしまった。

私には四人の弟妹がいて、一番上の弟が動物大好きだった。

クイズをして、よく動物のこと教えてくれたつけ。

この世界で私は本当に優しく愛されている。でもあの子たちは私がいなくなつて大丈

夫かな……

そう思つていると、誰かに優しく頭を撫でられた。見上げればエル兄様がいた。

「大丈夫？」

「ん……ごめんなさい、大丈夫です！」

慌てて笑顔を作ると、エル兄様は一瞬目を見開いてから微笑んだ。

「ファイルは時々、すごく遠くを見ているけど、何かを一人で抱え込む必要はないからね。僕や家族は絶対にファイルの味方だから」

「エル兄様……」

せっかく、学園祭で楽しそうだったのに、めんなさいの気持ちを込めて頭を下げる、大丈夫だよ、と言われてしまう。

それから私の頭をポンポンとひと撫でして、エル兄様はリーベ兄様のところに戻つていった。

「ファイル？」

お母様に声をかけられて、慌てて手を繋ぎなおす。

「どうしましたか？」

「ううん、なんでもないです！」

元気な声を出すと、お母様とお父様は一瞬首を傾げたけど微笑んでくれた。

まだ、私は家族に自分の前世のことを話していない。

話せないのは私の弱さだ。置いてきてしまつたあの子たちが心配だけど、どうするともできないし、今ここにいる家族のことよりも前世を優先しているような自分はあん

まりよくないんじゃないかなって思う。

いつか話せる時がくるかな？ 話せたらいいのにな。

「エル兄様、ありがとう！」

今はせめて、そつとしておいてくれてることにお礼を言うべく、私は大きく兄様に手を振つた。

それからお兄様たちはクラスの人たちに色々引き継ぎをして、私たちと合流してくれた。

次に向かうのはジュール兄様のところだ。ジュール兄様はどんなことをしてゐるのかな？

学園を飾つている外装の植物を動かしているのはジュール兄様だと前に聞いたけど、部活の方でも何か出し物を出しているらしい。

きっとジュール兄様の好きな植物関係の何かだと思うんだけど。

お花を売つたりとか？ それともお花の育てかた講座とかかな？ 私も植物は好きだ

あ、でもジュール兄様、家族以外とお話しするのは苦手だけ。大丈夫かな？

心配しながら今度は、お兄様たちと手を繋いで歩く。

本当は私のことをエル兄様が抱っこしたそうだったけど……それだと誰か一人しかできないからダメなんだって。

また喧嘩が始まリそくなつたので、妥協案として二人と手を繋ぐことになつた。父様たちのラブラブ手繋ぎも見れて嬉しい。

背の高い二人と手を繋ぐと正直腕が疲れるから、帰りはエル兄様に抱っこしてもらいたい。

甘えたことを考えつつ、眩しいほどの景色を見ていると、ふと視線を感じた。「ん？」

視線を感じた方を向くと、誰かとガツツリ目が合つてしまふ。

そこにいたのは見たことのない緑髪の男性だった。なぜか私を見て目をきらきらと……もとい、ギラギラさせている。

えと、どちら様？

そう聞こうとした時だった。

「妖精？」

「え？」

「あなたは妖精ですか？ なんの妖精ですか？ あ！ その可愛らしい見た目はスイートピーの妖精ですね！ ああ！ なんて可愛いんでしよう！」  
ぼそりとした咳きの後、ピックリするような速さでその人は私との距離を詰めてくる。  
何この人！ 怖いんだけど!?

「っ、おにいさま！」

本能的な恐怖に襲われて、エル兄様にしがみつく。

するとエル兄様が私をぎゅっと抱き抱え、リーベ兄様が私たちを隠すように立つてくれる。

「ああ！ 隠れないでください！ 大丈夫ですよ。少しお話がしたいだけですから」「いやです！」

リーベ兄様の身長で前に立たれたら結構怖いはずなのに、彼は今も私を見ようとしているのか、私たちの周りをクルクルと回つている。

何この人！ 人を妖精だとか言つて！ 違うから！ れつきとした人間だから！

というか、さつきからうちの家族から向けられている殺気にこの人は気づいていないんだろうか。私が本気で泣きだしたらどうなつてしまつかかるから泣くに泣けない。

でも私の近くから離れてほしい。

もうやだ、ジュール兄様と合流したらここから逃げてやるんだから！

そう思つた時だつた。

「……プラント、ぼくの妹、泣かした？」

「ジュール兄様！」

「ジュール君！」

少年の後ろから現れたのはジュール兄様だつた。

少年と私の声が重なる。

どうやら彼は、ジュール兄様の知り合いでプラント、というらしい。

ジュール兄様は彼——プラントさんが私を泣かそうとしたことに怒つてくれているようで、表情が硬い。

しかし、プラントさんは一切それに気が付いていないようで、にこにこと笑いながらジュール兄様に向かつて言つた。

「いいところに来ましたね！ 見てください！ 妖精さんが来てくれたんです！ すつごく可愛いでしょう。僕はスイートピーの妖精さんかなつて思うんだけど君はどう思いますか？」

ス、スイートピーの妖精……？

「……フィルは、ぼくの妹」

「え？」

ジュール兄様が、プラントさんとリーベ兄様の間に入り、エル兄様に抱っこされている私の手を握る。

「この子……ぼくの妹。フィエルテ。妖精みたいに可愛いけど……ちゃんと人間」

「なんと！ こんなにも可愛らしいのに！ 同じ人間とはとても思えませんよ！」

私が人間だと納得できないのか、彼はさらに近づいてじつと見つめてくる。

興味のあるものを理解しようとしてるのは分かるけど、まるで珍しい動物を見ているような視線が怖くて、体が強張つてしまふ。

「つ……」

「プラント、それ以上近づいたら怒る……。フィル、怖がつてる」

また生理的な涙が溢れそうになつて、ぐつとこらえたけど遅かった。

「うう、やだあ……」

エル兄様の腕に抱きつくようにして泣いてしまつた。

基本家から出られない私は、見ず知らずの人にこんなにグイグイこられたことがなく

て純粹に怖い。ぎゅうっとしがみついてイヤイヤと首を振ると、三人のお兄様たちは心配そうに私の頭やら手やらを撫でたり握つたりしてくれる。

同時に兄様たちとお母様たちの殺気がプラントさんに向く。

それどころかまさか私が泣くとは思つていなかつたのか、彼はトンボのような眼鏡をかちやかちやと揺すつてから、慌てたように両手を振つた。

「ああ！ 泣かないでくださいっ！ すみませんでした……本当に妖精みたいにすごく可愛かつたから、僕の植物大好きな気持ちが伝わって、ついに妖精が目の前に現れてくれたのかと思つたのです。ジユール君の妹さんだとは知らず……すみません」

早口に謝るその姿には特に私への悪意は見受けられない。

それが分かつたのか、お兄様たちからも少しづつ警戒の色が薄れる。

ジユール兄様も、プラントさんのことは十分すぎるぐらいよく知つているんだろう。

困つたような表情を浮かべて私を見た。

「ファイル……プラントも、悪気はないから。許してください？」

それにこくんと頷き返す。怖かつたけど、何か無理強いされた訳じゃないし、終始妖精さんつて外見を褒められただけだ。

……ただ勢いがとんでもなかつただけで。

それに、植物の妖精に会えたつて喜ぶくらい植物が好きなんだろうし、本当に悪い人じゃないんだろう。

そつとエル兄様に下ろしてもらつて、プラントさんの前に立つ。

「フィエルテ・フリードリヒです。は、はじめまして！」

カーテシーザをしてから顔を上げる。

すると、申し訳なさそうな顔をしながらプラントさんは自己紹介をしてくれた。

「僕の名前はプラント・スタイル。ジユール君の三つ上の学年で、同じ部活動を行つています」

「スタイル、さん？」

「プラントでいいですよ。ジユール君もそう呼んでますしね」

ちらつとジユール兄様を見ると、うんうんと頷かれたのでプラントさんと呼ばせてもらおう。

とはいゝ、年上の先輩にため口のジユール兄様、それはいいのかな？

しかしスタイルってスタイル伯爵家だろうか？ それなら植物好きも納得だ。

ジユール兄様がよく出かける植物の大会は、スタイル伯爵家主催のものが多い。

それはスタイル伯爵家が植物を生業にする家だからだ。

スタイル伯爵家は領内の農産業に力を入れたことで発展した家で、この国に出回つてゐる野菜や果物はスタイル伯爵家領のものが多いし、植物を使つた商品や薬品もスタイル伯爵家が何かしらの形で関わつてゐることが多い。

私がフォルトウナ商会でいつも買う果物もスタイル領産のものがほとんどだ。

そんな訳で、スタイル伯爵家は爵位がものすごく高い訳ではないけど、この国でも結構重要な位置にある。

まあ一族が植物にしか興味がなく、研究者氣質で社交界にも滅多に出でこないから、産業面では重要とはいえ、家名としてはそこまで重要視していない貴族が多いらしいけどね。

私はプラントさんを見上げる。

緑色の髪の毛に、大きな眼鏡。

私が勉強をした貴族年鑑にはまだ彼の絵姿や詳細は記録されていなかつた。つまり、彼はまだ成人していなゐのだ。

「フルーツ……」

「フルーツ？…………お好きなんですか？」

私が呟くと、プラントさんはすぐに私と目線を合わせるようにしゃがんでくれた。  
やつぱりいい人だ。

私は大きく頷いて続けた。

「フォルトウナ商会さんから毎日届く果物は、スタイル領からのものだよつてお父様が言つていました」

「ああ、確かにうちからフォルトウナ商会に卸してますね。なんでもこの頃はとても畠員にしてくださるお客様がいらっしゃるとかで……ウチとしても美味しく食べていただけるのは嬉しいですから、中でも状態や品質が最も優れたものをお渡しするようお願ひしてますが……もしかして、あなたが？」

「いつも美味しいフルーツをありがとうございます」

砂糖漬けの甘味が好まれるこの世界で、フルーツを好む子供は珍しいとよく言われる。だからきっと、これは私のことだろう。

ペコリと頭を下げる。

するとプラントさんは眼鏡の奥の目を丸くして、ジユール兄様を振り返つた。

「…………まさか我が家からフリードリヒ公爵家に卸していたとは知りませんか？」  
ジユール君。君は知つてたんぢやありませんか？」

それにジユール兄様はあいまいに微笑んで、返事をしなかった。

あ、この反応は知つた感じですね。

最近だと、スタイル領で果物を研究している人からと言つて、フォルトウナ商会さんが持つてくれるおまけが確かに増えていた。

それにすごくいい出来の果物とかをうちに優先的に持つてきてもらっていたし、ジユール兄様のお知り合いならもつと早くお礼を言えたのに。

それに美味しいフルーツを作る人って分かつてたら怖い人とは思わなかつたよ。多分。多分ね、うーん、でもさつきの勢いはやっぱり少し怖いかも？

どちかなあ、と思いつつジユール兄様を見上げると、ジユール兄様はプラントさんからそつと私を隠すようにして呟いた。

「……うちのフィルと会わせなくなかつた」

「どうしてですか!?」

「フィルは……可愛いし……植物のこともバカにしない……プラントも絶対、好きになる。それで……フィルがぼくよりプラントを優先するようになつたら……やだ」

お兄様……

相変わらずのシスコンが炸裂しちゃつてます。

そもそも誰も彼もが私を好きになつたりするはずがない。

確かに見た目は優秀な遺伝子のおかげでそれなりにいい自覚はあるけど、人は見かけじゃないからね！

でもそれより、私がジユール兄様より他の人を優先するはずがない。植物のことだって、確かにプラントさんの家は研究で有名だけれど、家でも学校でも植物に対して熱心なジユール兄様はそれに負けないと思つてゐる。教え方だつて上手で、難しい話でも私が分かりやすいように話してくれるから興味をそそられる。毒にも薬にもなる植物を、正しく育て、正しく使う兄様は尊敬できるんだ。

私の家族は尊敬できる人しかいない。自慢の家族だし、他の人なんかに目を向けている暇なんてない。

…………だいぶ話がそれちゃつてるな。

チラッとお父様とお母様の方に視線を向けると、あらあらと言つた様子でジユール兄様を微笑ましそうに見つめていた。他の兄様たちも肩をすくめている。

「僕は自他共に認める植物バカだからそんな心配は必要ないと思ひますけどね……」「あはは……」

私が苦笑していると、プラントさんも苦笑しつつ頬を搔いていた。それから、私に向

かつて手を差し出す。

「さて、怖がらせたお詫びがてら、僕とジュール君の部活の紹介をさせてもらつてもいいでしようか?」

「はい、ありがとうございます! ジュール兄様も、案内してくれますか?」

「……うん」

私が大きく頷くと、ジュール兄様とプラントさんは微笑んで後ろを手で示した。

今までには目に入つていなかつたけれど、そこにあるのは大きな温室だつた。

ガラスがきらきらと日光を反射してて、眩しいくらいだ。

ジュール兄様に手を繋いでほしいと言ふと、ちよつぴり驚いたような表情になつてから、そつと手を繋いでくれる。

うん、やっぱり兄様の手が一番!

中へ入ると、ふわっと暖かい風が室内から吹いた。

ジュール兄様が所属しているのは植物研究部だそうだ。

植物園の一角を借りて植物の育成方法や交配により新しい性能ができるのか、より良い品質のものができるのかを調べる部活らしい。今回の学園祭では、魔法と植物を組み合わせたちよつとしたショーミたいなのを行つてるんだつて。

温室の奥に進むと、室内には学者っぽい人から一般人らしき人たち、私と同じくらいの歳の子たちまでがたくさん集まつていた。

「わあ……!」

よく見ると、その人たちが魔法を使うことで周囲の植物が成長したり、光つたりキラキラしていくすごく綺麗だ。

その中で私の目に引つかるものがあつた。一本だけ、みんなの魔法からも外れてしまつているようで、白い幹がくつたりとしている。

あの苗木は……?

「ジュール兄様。あの苗木の元気がないみたいです」

「ん。……あれは、名前が、分からぬ木なんだ。図鑑にも載つてなかつた。あの苗木が魔力を吸つて大きくなるのは分かつたけど……。でもぼくの魔力に少し反応するだけで……あんまり大きくならない」

なるほど。

他の人は魔法をかけてみたけど、木が反応しないのを見て離れていつたのかもそれない。

ジュール兄様の魔法に反応するつてことは、ジュール兄様と家族の私にも反応するか